詞の玉緒　再板

一

ホ2
5599
1

和 七 芸 冊號函
ホ 3 號 5599 巻 1

本居宣長大人著

不許翻刻
千里必究

詞乃玉緒

全七冊

京攝
松坂
五書房梓

詞玉緒乃序

冬ごもり今を春べとのどかなる御代乃光ぞに。さくや此言葉乃花もにほひまさりて。いとやむごとなきころほひよなむありける。志かはあれども。影さへ見ゆる山の井の。心あさきうひまなびのともどちを。なほなほくれとまどはしきをぞお

あるかに。てにをはのとゝのへなむ。くら
ぶの山路やゝふてゆらむやうまで。おとゝす
みな人の思ひなやむことぞあやなかる。まこと
とふ此いさゝのもめぐるふしあらはにてし
ぢて思ひえたるも。猶よきぬのきざめあ
しりるおゝちして。ごもおちなく見ゆめん
るを。又それなるは一もじのんいきゝひよ。

難波堀江のみをつくし。深きいたりも見
えしられて。あまられさもおぼしさせてよろく
まさることぞおぼえり。こゝけるほどが深の意は。お
くふかきこと葉の趣意をめゆゝなすくま
けいりて。武さし野のかぎりよし野山乃
ちてまでもいてゝぬくまなくはきゝめめあ
へるに。もとより此ことわりを深く思ひと

まなひて。をでろいぞ此くらぶ山。うゑんの花にほはせてしがなし。うまちまちゑのますゑやうみおもなしまりるます。さいつころまづ鏡とりよいさゝかなほ一まきをはゞアきて世にひろゑなへましを。なほつまびらかにとて岩よきなぎさの玉やかひやとひろひあつめ。いづその松のしげき宮木なぞおほくろしいで。秋の花野のいろ〳〵まつりけ。さ浜ちどりのあとさへづゝになむかきつらねすひろる。此ふみを世にひろまりてしとのこゝろをきえましりかば。てふをはなちとのはしぎゑのおとしもくしも。ますよむらなくとけがさきふしも世になからむと。

はあよきおもふかれしさは。ふミの名を
おもふ玉のをのたぐひくしきくりて。
道のしるべとなりてならむと。のがきへ見む
るおのれらがみしも。おしとやかにて
ほうえあらで。ちからなきかへ序のなまく
よく人まもでほまれなみてぞよみてぞ
まふかきしるしつ。

稲懸大平

言葉の玉のをの序

此ふミの名よ。玉の緒としもつくる
よしハ。人の身にをよせにも。言葉の
緒乃みだれにも。何の事もし世には。
高きいやしきほどしにみな玉を
かむりのして。いみしきるかゝさん
たやすはしりれど。何ゆゑならへよ

香。みじかし。長し。あゆみぞあるなで
いなむとてのかじきなるも。ものり
そもぞが書て引うきぞ。うつきを続よの
常にさへあん。たゞへていひはるゝさる
きいをかぎりなく思ぞ続れ玉の
けぶりをなりむ何なも。ぬきつてすゝ
ん作るにてるがむくなむいま

一きはつのこともそのまゝぬべく。まく
しもなくきこえてもえしぬべくはる
ぶさも続てをはかいと我のなんなるま
じれありは有れ我。ましてさら我
くみゞきもし。続をしなむよは。
いふめでく世。其のかぎりいつゞら
なし〳〵しやな。ちるの紫の玉のよらむ

そうこ。此ぬきぬいてふをはうれん。これもかくもあるまじきなれど。又よそへしなむ。

安永八年十二月二十日

本居宣長

詞の玉緒目録

○一の巻

惣論　九のひらより
三転證哥　十五のひらより
○志　き　けれ　十五のひら
き　志　志か　十七のひら
てき　てし　十八のひら
○り　る　れ　廿ひら
なり　なる　なれ　廿のひら
けり　ける　けれ　二ツ　廿三のひら　廿四のひら
志　志き　志けれ　十六のひら
尓き　尓し　十八のひら
○ず　ぬ　祢　十九乃ひら
せり　せる　せれ　二ツ　廿一乃ひら　廿四のひら
たり　たる　たれ　廿二ひら
めり　める　めれ　二ツ　廿四のひら　廿五のひら

○ゐよ　ゐる　ゐれ　廿四のうら

てよ　てる　てれ　同

めよ　める　めれ　同

○ぬ　ぬる　ぬれ　三ツ　卅六のひら　卅二のうら　卅八のうら

○を　をる　をれ　二ツ　卅八のひら　卅一のひら

う　うる　うれ　二ツ　同　卅五のうら

ふ　ふる　ふれ　二ツ　同　卅二のひら

○く　くる　くれ　卅乃うら

つ　つる　つれ　卅一のひら

ふ　ふる　ふれ　卅二乃うら

せよ　せる　せれ　同

へよ　へる　へれ　卅五のひら

まよ　まる　まて　卅五のうら

つ　つる　つれ　二ツ　卅七のひら　卅一のうら

く　くる　くれ　二ツ　同　卅のひら

ぬ　ぬる　ぬれ　同

を　をる　をれ　卅一のひら

ぬ　ぬる　ぬれ　卅二乃うら

む　むる　むれ　卅三のひら

ゆ　ゆる　ゆれ　卅二のひら

う　うる　うれ　卅五のひら

○く　け　卅六のひら

つ　て　卅七のうら

む　め　卅九のうら

○ん　め　四十のひら

きん　きめ　四十二のうら

てん　てめ　四十四のひら

○まく　四十五乃うら

はく　四十六のひら

ゑ　ゑく　ゑれ　卅四のうら

を　せ　卅六のひら

ふ　へ　卅八のひら

ゑ　れ　卅九乃うら

らん　らめ　四十一のひら

なん　なめ　四十三のうら

らし　四十六のひら

らむ　四十七のうら

○二の巻

とまりより上へかへるてにをは　一のひらより

又かへるてにをは　七八のひら

變格　八のひらまで

本末にわたる格　十六十七のひら

てにをは不調の事　十六のひらより

一本にてにをはを写し誤れる事　廿三のひらまで

○三の巻

[は]　六ケ條　一のひらより　[はも]　三のひら

[ば]　四のひらまで　[はぞ]　四のひら　[ましかバ]　四のひら　[ずハ]　五のひら　[ては]　六のひら

[せば]　六のひら　[ましかバ]　六乃ひら　[ませバ]　八のひら　[なくば]　八のひら

[と]　五ケ條　九のひらより　[とても]　十二のひら

[ぞ]　九ケ條　十二のひらまで　[ぞハ]　十七のひら　[ぞも]　十八のひら　[ぞや]　十八のひら

[とぞ]　十五のひら　[もぞ]　十六のひら　[さぞ]　十六のひら

[の]　十三ケ條　廿一のひらより　[ものゝ]　廿七のひら　[のや]　廿八のひら

[が]　廿九卅のひら

○四の巻

[や]　類八ケ條　一のひらまで　[やも]　二ケ條　十のひら　十二のひら　[かや]　十三のひら

[めや]　十四のひら　[めやも]　十四のひら　[めやは]　十四のひら　[らめや]　十四のひら

[をや]　十五のひらより　[やぞ]　十七のひら　[やらん]　十八のひら

〇や（歎息）十八のひらより末　とや　卅九のうら　もや　六のひら

や（疑）三ケ條　卅二のうらより　ぞや　卅四のうら

か　五ケ條　卅四のうらより末　かぞ　二ケ條　卅九のうら　かも　二ケ條　三十九のひら　卅一のうら

めかも　卅二のひら　かは　卅一のうら　かや　卅二のうら

何の類　八ケ條　卅三のうらより　なに　卅九のうら　など　卌一のひら　なぞ　卌一のひら

たま　たが　卌二のうら　いかに　卌三のひら　いかゞ　卌三のうら　いかで　卌四のうら

いづれ　卌五のひら　いづら　卌五のひら　いつ　卌五のうら　いく　卌七のひら

〇五乃疑

こそ　十二ケ條　一のうらより末　こそハ　二のひら　めこそ　三のうら

ことこそ　四のうら　さこそ　四のひら　さもこそ　六のうら

ぞ　十ケ條　十一のうらより末　ぞも　二ケ條　十四のひら　十六のひら

ど　十七のうら

を　四ケ條　十八のうら

に　七ケ條　十九のひらより

て　廿二のひら　にて　廿二のうら　ずて　廿三のひら　てへ　廿三のうら

で　廿四のうら　なで　廿四のうら

な　四ケ條　廿四のうらより末

み　三ケ條　廿七のひら

よ　二ケ條　廿九のうらより　とよ　卅のうら　ぞよ　卅乃うら　よな　卅一のうら

ね　卅一のうら

志　助辞　卅二のひらより

らく　卅七のひら

まく　附　は　卅七のうら

をく　附　をし　をき　卅八のひら

かし　卅九のうら

しも　二ヶ條　卅八のうら　卅六のひら

〇六の巻

むすびさとゝだし

志　き　一のうら

あり　ある　あれ　二のひら

ぬ　ぬる　ぬれ　四乃うら

ぞ　ぬ　祢　一のひら

けり　ける　けれ　二のひら

つ　つる　つれ　三のうら

紐鏡第十九段より第廿二段までの事　三のうらより

ん　め　八のひら

けん　けめ　十二のひら

まし　十六のうらより

はく　九のひらより

がな　附　が　がも　十五のうら

らん　らめ　八のうらより

なん　なめ　十三のひらより

らし　附　べらし　十九のうら

かな　十四のうら

〇七の巻

古風部

萬葉集中てにをはたがへる事　三のうらより

同集中てにをは違へるに似て違へざる事　六のひら

同集古言は一つの格　八の表

同集中てにをはの訓を誤まる事　九の表

古風の辞づかひ　十一の表より

そ　くそ　そも　とよ　十二の表より

ぞ　もぞ　かぞ　ぞも　十四の表より

の　十六の裏

や　もや　かや　やも　をしぞや　十七の表より

か　かも　ろかも　廿の表

し　よし　やし　しも　しぞ　しこそ　廿二の裏より

な　廿四の表

ゑ　廿五の表

い　廿五の表

むを略く格　廿六の表

くさぐのやすめ辞　廿六の裏

ぶよ安ふゆ　まに安ふえ　廿八の裏

らもぶを略く格　廿七の表

よ尓似るを　廿八の表

みよ安ふがるを　廿九の裏

ぞよ安ふよ　廿九の裏

祢ぞ　廿九の表

ぞぞ　三十の表

ぞもかるを　ぞもかる　ぞもかき　ぞきん　卅一の表

からんのこのをん　卅二の裏

ちを、　ちをなを　ちせぬるを　卅二の表

がを　が尓　卅三の表

さを　卅四の表

そ祢　卅五の裏

もの　卅五の裏

して　廿五のひら

しく　廿六のひら

なと　廿六のひら

く　廿七のひら

らく　廿七のひら

まく　をまし　をまく　廿八のひら

文章の部

廿九のひら～この中

詞瓊綸一之巻

○てにをはゝ。神代よりおのづから萬のことばにそなはりて。その本末をかなへあはするさだまりなん有て。あがれる世はさらにもいはず。中昔のほどまでも。おのづからよくとゝのひて。たがへるふしはをさ〳〵なかりけるを。世くだりては。歌にもさらぬ詞にも。このとゝのへをあやまりて。本末もてひがむるたぐひのみおほかるゆゑに。おのれ今此書をかきあらはせるは。其のさだまりをつぶさにをしへさとさんとてなり。

○近き代に或人。てにをはを漢文（からぶみ）の助字なめしといへり。此言何と聞ゆるやうなれど。さるまゝのことをしる人おほかめり。まことにい

とよく似てハあれども。さる中に猶てにをはをよくしらぬものの文なん有ける。其のゆゑハ。ちからぶみの助字といふなる物を。その本と末をとりかひてうつして。かなへあてするさだまりハなけれどものゝあるをもて。ふをそくだしふ此けぐまでハあとゐて。いさゝかとくるがひぬまでぞ。今の世そのそだ文も何もまべくいへらじおとすしきなんなるあるを。いまだしれるとがしハ。さる物にて。近き世ハ。言よくよむと思ひていふこゝまふんせる人ぞ。ふるきにつけてハ。かくゆがめんりてそこなふるぞむ。よふおほきぞり。さるをかれ助字といふ物とかさる同じたぐひのと思ひまなたらん事ハ。此本末をバかれへんかのさとたかひあるぞかで。たゞおのがふりしのまゝにせつ物

まべくあらバ。よくいみしきむかしの文引出なんものぞや。

○又ある人。てにをはの本末かゝるの人を。定まりけるやうにて。又さららずさしもなうらじ。されど其のたゞぞのおもむきと。しるべしふまるからとかくとそうひゐきくさまざましといへり。こまねいはしへの文字も好てにをはを。しろくと考へあつめむて。おほかる中に。こまとられとちくのひの事しらぬなど。思ひくこそなをたけちせてゆゑもなく事がらろえつるかあして。さらひしかるね。こまととうれもさもにけむまりあるてにをはえらぬあるべし。かく後人のおのまよくりれま人まるりと思ひふかりて。へかてそうにえこうらひあのしつるてにをはをよ。みだりにこそよりしおもへど。あれ

かくになることうちまじりて。人みなへうとあるさだまりうし。いにしへのよきなどものを。うまなびしらでハえしらぬ。おのづからのあとをよりたりて。定まりつる趣をしらんものなれど。かりそめにもそればえなまもて。こゝろしてさかしらをバ。露ばかりもくはふべきにあらざるぞ。まづいづくまでもしく。ふることをたづねて。其のかたはなんまでひよるべきことぞなりける。

○てにをはのとゝのへ。その本末をかなへあはせて。いにしへのさだまりはあやまりなきをなん。むかし人はきはめしれど。おのれさきに紐鏡といふものを作り出て。三條の大綱をしめして。其さだまりのかぎりをかたりしらせき。そはやがて此書の目録のやうにて。てにをはその大むねをしらまほしからバ。此物を考へんには。つゞふみのむねし緒をかくさりてよろづおきて。かひてしるべきやうとの三條（みすぢ）の大づなをまづよくふとりおきて。むすびざまとしらんにぞてにをはも。ちぢくおのづからはちからふるきをよみて。法のおのがみだるゝことなかるべし。

○紐鏡の三條（みすぢ）の大綱（おほつな）とハ。右[は][も][徒]（徒とハはもぞのや何こそなどいふ辞のなきを今かりにかくいふ也）の結（むすび）び一條。中[ぞ][の][や][何]（いかいくなどのたぐひ同ド）の結（むすび）び一條。左[こそ]の結（むすび）び一條。此三條なりて。これなんてにをはの大方（おほかた）なりける結（むすび）びとハ。言のとぢめをいふ。さるは一首（ひとうた）のとぢめのみにもあらず。いづれの句にまれ。語の切（き）る所ぞ。其とぢめにて。上よりかゝるてにをはの結（むすび）びなり。さ

右の三條にしるしてあげたる係り結ぶ辞のさだまりあるなかに。上をは（も徒ほど）といへばけりとむすび。ぞ（のや何ほど）といへばけるとむすび。こそといへばけれと結ぶるがひを。たれもよくしられまへなるごとし。は（も徒ほど）といへばしと結び。ぞ（のや何ほど）といへばきと結ぶと。又は（も徒ほど）といへばきとむすび。ぞ（のや何ほど）といへばしと結ぶと。何よりて。かくかへさまにとあるなどハ。後の学ぶ人もまく得るべくなりぬ。（是ハ紐鏡のはじめ五段の内。上二段ハ。右のくだりしにて結び。中のくだりきにて結ぶ格なるを。下三段ハうちかへして。右のくだりき。中のくだりしにて結ぶ。此ゆゑ。しときとたがひにかはれるなり。初学ぶ人をまどはしやすし。よくわきまふべし）又は（も徒ほど）といへばぬつると結び。ぞ（のや何ほど）といへばぬるつるるゝと結ぶ言なり。此さかひのまぎれるなどをバ。後の学ぶ人も。まさしくこれまへなりぬなりや。皆むね川にまぎれ得るて続めにありし。（此差別ハ次にいふ）

（あくいふがおほし）まぎらはしきことなれば。先是をとりて大綱の三條のさだまりをたづねて。これまへなるべし。

○またこの詞づかひに。切るゝと続くとの二のさだめあるをも。これまへおくべし。是を上の件にいへるぬつるとぬるつるるゝとの例にていはゞ。花さきぬ。鶯なきつ。もみぢ葉ながるなどいふたぐひのぬつるを切るゝ辞也。ことを桜花ちりぬる風のまゝ。鶯なきつる枝をえゝ。もみぢ葉のながるゝ川になどいふ時ハ。ちりぬる風。なきつる枝。ながるゝ川とやうに下へ続くさまぞ。ぬるつるるゝなどハ続く辞也。（ちりぬ風。なきつ枝。ながる川などハつゞきがらし。又花ちりぬる。鶯なきつる。もみぢ葉ながるゝなどいひてハ。語切れずとしるべし。かくのごとくなどにぬるつるるゝとつゞけそを切るゝこともあれど。後世人のひがことなり。其よしハ下にくはしくいふべし。）かくて此切るゝ辞ハ。ことごとく紐鏡の右行

の段にわかり。はたらく辞を中行の段にかゝらし件の[ぬ][つ][ろ]と[ぬる]

[はる][なく]との例に准へていづれをも考へさとるべし。さて又。切るゝ所も

はたらく所をはじき何もあり。関成給ふ知らするの[く][も][つ][ふ][ろ]のるゐ

ぞひ。又[ん][らん][まん]なぞの類也。これらは何のつらねざまにしたがひて。切れ

もつゞきもするなり。されど鏡の第卅三段[く]右行[け]左行よりは。これらの[てん]右行[てめ]左行

まで。合せて十一段の辞とさとし。此十一段を皆。切るゝとはたらくもはじき

なるべし。右行（みぎのくだり）と中行と一つになれり。考へみるべし。

○ひも鏡の右行の段は[は][も][徒]の結び（むす）辞也。中行の段は[ぞ][の][や]

[何]の結び辞也。左行の段は[こそ]のむすび辞也。かくて右の行は。上よりいへ

ばぬくことなく切るゝ辞なれば。見るより結びにまがひなきを。中の行はことなる下

へはたらく辞なるに。[ぞ][の][や][何]の結びとなる事は。まぎらはしき事は疑ひあ

るまじけれバ。今その心得を委しくいふべし。先中の行を皆。つゞきとはつゞ

く辞なる故。上より[ぞ][の][や][何]のてにをはうける時は。その結びとなりて切

るゝ也。例を一つ二つあげていはゞ。古今集春下にちるを見てよめる

桜をひらくは上よりよゝふのこ行道ぞ見し。桜花くは二つの[こそ]はほど

[こそ]なるに。（二つながらふいをゆるさぬこその／こそまして中の行の辞也）見つゝとどらし。此方は。あし桜花とつゞきてし。

常のさぬなり。はたらきなるぞ見しの方は。上より[ぞ]とある故に。其結ぶべくな

りて切れたり。又同集春上に。山高み人もすさめぬさくらばな。は

下にあくあらバさかずやはあらぬ桜花とく。此二つの[ぬ]を同じ[ぬ]なる

を。（ことに不のこゝろのぬ／たゞ中の行の辞也）すさめぬの方を。桜花へはたらきて。常にさかず。さらぞやよ

おゝぬの方ハ。上に〔や〕といへるゆゑに。切れてそのむすびとなれり。大かたこまゝをりて。中の句の終し〔ぞ〕〔の〕〔や〕〔何〕の結びのやういづれともなきらん。あるべし。かゝればまぎるゝ〔こ〕〔そ〕〔徒〕のむすびを。むも後の七の句にて。切るゝ辞。〔ぞ〕〔の〕〔や〕〔何〕の結びを。中の句にてつゞるハ続く辞と心得るこれをよろづのてにをはなずらふべし。（○中の句の辞にて結ぶハ。必上より〔ぞ〕〔の〕〔や〕〔何〕のてにをはをそのいへるに限）もと上より此四つのてにをはをそへよみたれど。みな下へつゞきて。切れざるなし。然るを後世になりてハ此格みだれし。上より此四つのうちのてにをはをおかずして。中の句は辞にて結ぶこと多くなり。それをおのづから定まりに違へることなるゆゑに。歌家そのもの次。一首のさまいやしく聞ゆるなし。文章にハ近代ことに此あやまりおほし。それハ七の巻の文章の説にくはしくいへるを

おのれより経て歌にまれなりしまゝ。てにをはそのそのつゞきと。そのそざることえ。此二つのたがひにわかることあり。さてまして〔こ〕〔そ〕〔徒〕の結びと。〔ぞ〕〔の〕〔や〕〔何〕の結びもまぎるゝ所ぞ。かゝらぬもいふまじことハかはれ。むも続来

第三段〔く〕右行〔け〕左行より。終りまでは十一段まで。此段々の辞どもハ。切るゝ所と続く所と又一つにて。かはらざること。上にいへるがごとし。さて切るゝ所と続く所とがまぎるゝ詞あり。てにをはを結びてのへもかゝれり。切るゝ続くねじ詞そ。てにをはのさまと又同じきハ。いともあやしき言霊（ことたま）のさだまりにして。まことにあらそひがたきわざなりかし。次に左の行（ぎやう）の〔こそ〕は結びを。大かたまぎるゝことなし。

○上（うへ）の件（くだり）は結びなどを。よく行きとめえらんにハ。第一はてにをはのそくのへ。ゆるさくたゞを心得たるきふやしなほふるまゞど。ひまなびのそれがくなぐハなれえちより行きとめぬくまぐち。なかなかびわるまじおそもいふぞ。又まぶまるてハかれぐ思ひあがらずがちなりて宣長が考へ

て。いひそでつゞるすたまで。むかしの人々の。さらにいひおかざりけることなれ
ば。いかゞからんと。疑はしくつうふらむたがひをのこして。むかしよる事ハさきをそむ
き用ひぬ人もありぬべきなれ。よりかの大綱の三條の法く
の三轉の辞毎首。（三轉とハ。上のてにをはをむすぶ詞の。一首の。三くさにうつりかはるをいふ。ぞ□る□る□あれなどの如し。すべて此書の中に三轉とい）
ふる。皆。古き歌どもを引出て。此下につぎ〳〵に一々あげて。猶
あらたむべし。かゝる人なほあとをさとし。かれをこそよみもいにしへの法
則の定まりにして。げにふたつのかなはぬことゝもはなれずして又のさとし
ともおもふ人もあらむかし。されども又なほあやしと思ふ人も何かならば。めづらしきことを疑
はじめよりおのづから出て。ちゞにさせるこそよ。さてまれにけすゆみがり
あらぬふしどもハ。さとりもすてぬべき。

○さて又此書に。てにをはを三轉。或ハ結び辞。或ハ変格。てにをはを歎息のや。なども（いく
つるたぐひの名目ハ。おのが今かうがへにまうけたるにて。すべて物をくはしくまうしへさ
だめてみハ。かならず何くれと名目をたてゝ。事をわかつでハ。たどりにまぎれてかうがへ人の耳をおどろかさ
るゝなれど。しやむことをえずて。かくまうけつる也。なぞらへてこれらを
もまてよく心得て。あるやうをこのみてさはかゞれ。よくそれをとりて。なほおもひこゞめ
て。）

三轉證歌

し 右行

き 中行

けれ 左行

紐鏡第一段

右

は　も　徒

ぞ

古十三　有明乃つれなく見えし別れより暁ばかりうきものはなし

同　こりずまに又もなき名は立ぬべし人にくからぬよにしすまへば

同二　いつまでかのべに心のあくがれん花しちらずはちよもへぬべし

同六　我宿八雪ふりしきてみちもなしふみわけてとふ人しなければ

同十七　おちたぎつ瀧のみなかみ年つもり老にけらしな黒きすぢなし

同九　みやこ出てけふみかの原いづみ川川風さむしころもかせ山

同四　かくばかりをしと思ふ夜をいたづらにねてあかすらん人さへぞうき

同二　のこりなくちるぞめでたきさくら花ありて世中はてのうければ

中

の　や　何

左

こそ

同十二　ひとりして物をおもへば秋の田のいなばのそよといふ人のなき

○のの結びなるぞあるぞもてかよるかは。まさしくえがたけれ。右そのしことより下限て。皆こゝをもぢるとぞ。このいとまれにえたるは。別にのの結を出せり

後十三　あまだくりぬらん袖乃かわくねもきみがおもひのなどやまくなき

壬二　おもふことちえにやしげき呼子鳥信太の杜のかたになくなり

古十一　瀧つ瀬の中にも淀はありてふをなど我恋の淵瀬ともなき

拾十九　えつえんぐゝなにゝかはつるき　はしくらバみぞらにゆきてもへんよろし

古四　をみなへし吹すぎてくる秋風はめにも見えねど香こそしるけれ

同十五　こゝろこそうたてにくけれ染ざらバうつろふこともをしからましや

し 右

しき 中

しけれ 左

第二段

右
は　も　徒

新十七 くるゝ八と思ひ捨ても松のをとづれてゆく風はうらめし
後六 秋霧はたちてはうれし　女郎花立よる人やかるらんとおもへバ
古十八 いざこゝに我世はへなん　菅原や伏見の里のあれまくもをし
拾十九 よのなかを思ふもくるし　いとせめてうらみてゆるむこゝろぞ見
万八 衣手にしみゝふりくる梅の花へるゝ(?)らし
古古 かはづこひし　今とてもしが山川のかきねに咲るやまぶき　拾子

中
ぞ　の　や

同一 春は日のひかりにあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき
同九 山かくす春の霞ぞうらめしき　いづれみやこのさかひなるらん
後三 吹風のさそふ物とは知ながらちりぬる花のしひて恋しき
古四 秋萩もいろづきぬればきりぎりす我ねぬごとやよるはかなしき

や　何

同二 花のちることやわびしき　春がすみたつたの山のうぐひすの声
後九 浅茅生の小野の篠原忍ぶれどあまりてなどか人の恋しき

左
こそ

後十 何とみればおぼつかなさは深かれば今ぞ思ふこそきみ恋しけれ
古四 月みればちゞに物こそかなしけれ　我身ひとつの秋にはあらねど

き 右
し 中
しか 左
第三段

右
は　も

後三 風ふけばおもふもふるまかせん　ちる花のあひおもはぬちるはうかりき
同二 みぬ人の形見がてらはをらざりき　身になぞへつる花にしあらねバ
万十一 かくばかりこひん物ぞと思ひせば妹がたもとをまかぬよもありき

中

〔も〕〔徒〕　〔ぞ〕〔の〕〔や〕〔何〕

拾十四 手枕のすきまの風〔も〕さむかり〔き〕 身ハならハしの物にざりける

万二 みわ山の山べまそゆふみじかゆふかくのみからにながくとおもひ〔き〕

同四 人ごとをしげみこちたみあはざり〔き〕 心あるごとくおもふなわがせ

後十 なかるやとよりさし出されし船よりも我〔ぞ〕よるべもなきこゝちせ〔し〕

古四 みどりなるひとつ草と〔ぞ〕春ハ見〔し〕 秋ハいろ〱の花にぞ有ける

〔し〕

後七 うふてこそ秋しもまねに見ゆるばかりつゝ〔や〕家を人の身のえ〔し〕

後拾十八 いそぬまを浅くみし袖ハになしつるを〔や〕見え〔し〕 やまぶきの花

古十六 花よりも人こそあだになりにけれ 〔いづれ〕をさきに恋んとか見〔し〕

同四 〔何人〕かきてぬぎかけ〔し〕 藤ばかまくる秋ごとに野べをにほはす

左

〔こそ〕

拾十一 恋すてふ我名ハまだき立にけり 人しれず〔こそ〕思ひそめ〔しか〕

古四 きのふ〔こそ〕さなへとり〔しか〕 いつのまにいなばそよぎて秋風の吹く

〔にき〕 右

〔にし〕 中

第四段

右

〔は〕〔も〕〔徒〕

古十三 よるべなみ身をこそとほくへだてつれ 心〔は〕君が影となり〔にき〕

後三 君こずてとし〔は〕くれ〔にき〕 立かへり春さへけふに成にける哉

同十四 すがはらや伏見の里のあれしより かよひし人のあと〔も〕たえ〔にき〕

古十四 かくこひん物とハ我〔も〕おもひ〔にき〕 心のうらぞまさしかりける

源氏竹河 ながれてのたのめむなしき竹川に。よハうき物と。おもひしり〔にき〕

古十三 かきくらす心のやみにまどひ〔にき〕 夢うつゝとハ世人さだめよ

中

ぞ　の　や　何

後十
音にのみきゝこしみむろの山よりも秋乃[illegible]をバ君ぞみえにし

古十六
志での山ふもとをみてぞ帰りにし　つらき人よりまづこえじとて

にし

後九
新しぶふとみしぞありゆく山の井ハ浅きより又あさやたえにし

古十
郭公峯の雲にやまじりにし　ありとハきけどみるよしもなき

新十六
和歌所歌合に款冬
八重ながら色もかはらぬ山ぶきの　など九重にさかずなりにし

神代よりいくよをにし　をとめごが袖ふる山乃みづ垣乃杜

てき　右

てし　中

第五段

は

古十二
うたゝ寝に恋しき人を見てしより夢てふ物はたのみそめてき

右　　　中

は　も　徒　　ぞ　の　や

拾十一
よびつくも渡月だくりはゐとしてき　いやよどみのかずまさるらん

万十三
かつりかし人を思ふともなぞ玉の緒のよはながきをいも寝かねてき

後十三
白雲のゐる一むらにみえしかど立出て後はおもひそめてき

詞十
もゝ世の花にやどりて過してき　此身ハ蝶乃姿ぞなりける

古十一
よし野川岩波高くゆく水のはやくぞ人を思ひそめてし

てし

てし

何

新古 恵慶
袖にたつるかすゆされ尾のたれゆゑにみだれて秋は思ひ（おもふらん）てし
新後撰 家隆
いくよせかあきふかしてし＝新古かくるみ山乃はみどりのそら

ず 右　ぬ 中　祢 左　才云隠

右

は　も　徒

古十三
夢路には足もやすめずかよへども＝うつゝにひとめ見しごとはあらず

後十三
うつゝにはふせど寝られず＝おきかへりきのふの夢をいつかわすれん

古八
志たはれてきにし心の身にしあれば＝かへるさまには道も志られず

同五
ちはやぶる神代もきかず＝立田川からくれなゐに水くゝるとは

新十一 六帖
春日野の若むらさきのすり衣＝しのぶのみだれかぎり志られず

後拾三
あしひきの山ほとゝぎす汝のみならず＝大かたも[illegible]しまで

中

ぞ　の　や　何

古二
桜花とくちりぬとも思ほえず＝人の心ぞ風も吹あへぬ

同十三
長しとも思ひぞはてぬ＝むかしよりあふ人からの秋の夜なれば

同六
みよしのの山のしら雪ふみわけて＝入にし人のおとづれもせぬ

後八
流れゆく水こほりぬる冬さへや＝なほうき草跡はとゞめぬ

古十三
月やあらぬ春や昔の春ならぬ＝我身ひとつはもとの身にして

新三
夏草はしげりにけれど郭公＝など我宿に一こゑもせぬ

同三
行かよしはたれ久しからぬ＝くるまでの暁のこゑをも猶まさるらん

左

こそ

古十三
おもへども人めづゝみの高ければ＝川と見ながらえこそわたらね

同
春の夜のやみはあやなし梅花＝色こそ見えね香やはかくるゝ

り　右　る　中　れ　左　第七段

右
は　も　徒

（古十九）人にあはむつきのなきには思ひおきてむねはしり火に心やけをり

（後十六）むかしより恨みたるなをぞ秋笛竹の聲のうらにも思ふこゝろあり

（風雅十　為家公）君にのみきけバかひなし時鳥あしかりけんと思ふころなり

中
ぞ　の　や　何

（古十九）枕よりあとより恋のせめくればせむかたなみぞとこ中にをる

（同）うめの花見にこそきつれうぐひすのひとくひとくといとひしもをる

（枕ざうし）元輔がのちといはるゝ君しもやこよひの歌にはづれてはをる

（古十八）あさのゝちひまかしぢのなかにいつ久しき宮乃まゝある時ある

左
こそ

（後七）など我身したは紅葉と成にけむ同じなげきの枝にこそあれ

○此段をかゝりて結べる言ハ例すくなければ畧りつ

せり　右　せる　中　せれ　左　第八段

右
は　も　徒

（新古）ちか川宮のふるから神杉うつりきてしめゆふかべはきこもりせり

（夫木）むかしつぎハ神のむかしうつりてなせり」むらがる根とゆふかづらせり

（後拾二　太大臣家にて後たて）秋ふかみまだ紅葉は山と紅葉せり」名をバ時雨もそめじとやふる

（古今序）此かきくべきみなり」さに春かう川をよろづよに斂づらせり

中
や

（源氏桐壺）いさゝぬきちやくなるも云でを本乃あるじや西がりせる

○此段ぞの何こその結び方見えず　□□□　まれなるゆゑにくはしからず
ものづからあぐとていふべし。

○なり　右　なる　中　なれ　左　第九段

㊨

は	も	徒

古十八 こがいなそみやこはなれつゝきこそまさむ‖よそにちる人[は]つよ[なり]

古十六 みな人[は]花の衣になりぬ[なり]‖苔のたもとよかわきだにせよ

拾四 神無月ふかくしなりし‖菅の葉のうらうらなる森[も]なく[なり]

古十九 難波なるながらの橋[も]つくる[なり]‖今は我身をなにゝたとへん

古六 みよしのゝ山乃白雪つもるらし古郷さむくなりまさる[なり]

古四 秋の野に人まつ虫の声す[なり]‖我かとゆきていざとぶらはん

㊥

ぞ	の	や

古三 おとは山けさこえくればほとゝぎすこずゑはるかに今[ぞ]なく[なる]

古四 秋風にはつかりがね[ぞ]きこゆ[なる]‖たがたまづさをかけてきつらん

千四 を埜の萩やをしかのつまなるらん‖花咲しより声[の]いろ[なる]

源氏梅枝 浅きあさハうれよのつねにふかりゆくをさまたげぬ人[や]人よりこと[なる]

何

古十九 あとよしとハ思ふぞともやもひまそね‖[なぞ]よの中はまだたき[なる]

古十八 世中は[なにか]つね[なる]‖飛鳥川きのふの淵ぞけふは瀬となる

㊧

こそ

後十八 あされてふあらふちゝし八雲にもありいまでハえ[こそ]ゆかぬ海[なれ]

古十四 くちるん[こそ]今ハわれ[なれ]‖こときまくバ見すゝめ時もゆくらし梅枝

[たゞし] 右 [たゞ] 中 [たゞ] 左

第十段

㊨

は	も

金五 なきものゝ名[は]いかにまちせ[たゞし]‖みやまぎあるをが住代かな [たゞし]

万十八 ちらし袋よりなぎまへおきうへさへおのれとおのやうら[も]つぎ[たゞし]

中

［も］［徒］　［ぞ］［の］［や］［何］

（拾十）年もよしこがひ［も］え［たり］＝大国の里たのもしくおもほゆるかな

（同一　兼盛集）ゆる里え春えきふたり＝みつしほのみうきがふ汲みすくこえ［たり］

（夫木　後集て）鳴神乃おとはをさめ［たり］＝いなづまは光ばかりぞ夕立のそら

（源氏若紫）よる波の心もしらでわかの浦に玉藻なびかんほど［ぞ］うき［たる］

（能宣集）衣手［ぞ］けさハぬれ［たる］＝思ひ寝の夢路にさへや雨はふるらん

（千十八　雑歌下　物名）萩の錦にうつしをせん人やきてしりきん＝淀のみこと［の］けさぞぬれ［たる］

（源氏をとめ）うぐひすのむかしをこひてさへづるハ木づたふ花の色［や］あせ［たる］

（古二）咲花はちくさながらにあだなれど［たれ］かハ春をうらみはて［たる］

左

［こそ］

（源氏玉かづら）ゆくさきも見えぬ波路に舟出して風にまかする身［こそ］うき［たれ］

［けり］右

［ける］中

［けれ］左

第十一段

右

［は］［も］［徒］

（古二）ふるさととなりにしならのみやこにも色はかはらず花［は］さき［けり］

（同一）年の内に春［は］きに［けり］＝ひとゝせをこぞとやいはんことしとやいはん

（同）あだなりと名にこそたてれ＝桜花年にまれなる人［も］まち［けり］

（同十三）秋の夜［も］名のみなり［けり］＝あふといへばことぞともなく明けぬるものを

（同一）宿ちかく梅の花うゑじあぢきなくまつ人のかにあやまたれ［けり］

（同三）わがやどの池の藤なみ咲に［けり］＝山郭公いつかきなかむ

中　左

ぞ　の　や　何　｜　こそ

古六 冬ごもり思ひかけぬを木の間より花と見るまで雪[ぞ]ふり[ける]

同 山里は冬[ぞ]さびしさまさり[ける]＝人めも草も枯ぬとおもへバ

後拾三 うきをしのびて思ふ人あるなにや見えなにやしく駒[の]ささめぎり[ける]

後六 今ハとやうち忘るべき一日旅乃むかしまでよそ[や]床に[ける]

後拾十七 ますしに[や]同じすみハ入りし[ける]＝むかしより八吾へゆかしし思ふに

新後拾十七 菅原孝標 ささもみぢ葉をしのぶべしやハ＝秋くれバ[いづく]か冬のかれざり[ける]

古六 雪降りて年の暮ぬる時に[こそ]つひにもみぢぬ松も見え[けれ]

同又 秋をおきて時[こそ]有[けれ]＝菊の花うつろふからに色のまされバ

右

こそ　も　徒　｜　ぞ　の

[めり] 右　[める] 中　[めれ] 左　第十二段

後十八 いせ渡る川ハ袖よりながるれどとふにとはれぬ身[こそ]うきぬ[めれ]

同十五 海とのみ涙のあらし[こそ]あらね[めれ]＝そながしかしぬ新のすまひバ

同十八 飛鳥川ふちせにかはる心とハみなかみ下の人[も]いふ[めり]

後拾三 五月雨に日[も]くれぬ[めり]＝道遠み山田のさなへとりもあへぬに

続後拾一 いせ集 うめの花かぶかふかへまちて降る雪にいろまがふ[めり]

古又 立田川紅葉みだれてながる[めり]＝わたらバ錦中やたえなん

同十八 ありふきんきてもいとへ年ハ浪乃まよへる花に風[ぞ]吹く[める]

古和歌 花すゝき君が方に[ぞ]なびく[める]＝おもはぬ山の風ハふけども

兼安三 廣田社歌合 おき川岸に生ふやくるらんあをりをる芦間のたづ[の]立さわぐ[める]

㊥

や　何

める　める

㊧

こそ

夫木　貫之
ひざし[こそ]くるしをなつ[めれ]＝まがりあふちひまつりて書つゞらまば[めれ]

けり　右
ける　中
けれ　左
第十三段　第十一段のけり等とも異なり

せり　右
せる　中
せれ　左
第十四段　第八段のせり等とハ異なり

てり　右
てる　中
てれ　左
第十五段

㊨

は　も　徒　ぞ

へり　右
へる　中
へれ　左
第十六段

めり　右
める　中
めれ　左
第十七段　第十二段のめり等とも異なり

此五段は徒にもあれ何にもあれ一つにまじへ出せり

後十五
いせの海のつりのうけなるさまなれど深きこゝろ[は]底にしづ[めり]

万十五
わがゆゑに妹なげくらし風早の浦乃おきべに霧たなび[けり]

□

万八
わがやどの萩の下葉は秋風もいまだふかねばかく[ぞ]もみ[でる]

㊥　㊧

ぞ　の　や　何　｜　こそ

千二 口なしの色にぞそめる＝山吹の花乃下ゆく井手の河水

後拾一 あふ坂乃関をやはるもこえつらん＝音羽の山のけさはかすめる

古一 春霞たつを見すてゝゆく雁は花なき里にすみやならへる

同三 [illegible]乃やま[illegible]る＝郭公[illegible]もなく

拾十七 たなばたの[illegible]ゆくしきを[illegible]も[illegible]かきませる

古一 わび[illegible]とも名にこそ[illegible]＝[illegible]にまがへる人もまちつれ

めり 右
める 中
めれ 左

第十八段

㊨　㊥

は　も　徒　｜　ぞ　の　や

古廿 みさぶらひみかさと申せ宮城野の木の下露は雨にまされり

同八 [illegible] みやまには[illegible]まされり＝[illegible]の[illegible]人そこ[illegible]らん

古一 春日野はけふはなやきそ若草の妻もこもれり我もこもれり

正治百首小侍従 なか[illegible]もこもれり＝[illegible]の江まで[illegible]つらし

新千一 [illegible] いさりするよさのあま人出[illegible]し浦風ゆるくかすみ[illegible]れり

新十六 秋を経て月をながむる身となれり＝いそぢの闇をなになげくらん

古四 きりぎりすいたくななきそ秋の夜のながき思ひは我ぞまされる

拾一 ちかくてぞ見ハまさ[illegible]れる＝青柳の糸えよりてぞ見るべかりける

古一 ちるとみてあるべきものを梅の花うたてにほひの袖にとまれる

後十二 うちかへし見まくぞほしき故郷のやまとなでしこ色やかはれる

左

や　何　ぞ

貫之集
わび人の袖をやかれる═山川をなみだのごとく落る瀧か那し

千六
わきもこが玉藻の床にうちはらへる涙き思ひもたまくまさまる

まで

ぬ　右
ぬる　中
ぬれ　左

第十九條

右

え　と

古二
春の野にわかなつまんとこし物をちりかふ花に道もまどひぬ

同一
年ふれバよはひもおいぬ═しかハあれど花をしみれバ物思ひもなし

新廿
[illegible]に川のながれし清くすみぬれバくもりなき月の影とうかびぬ

中

も　徒　ぞ　の　や　何

古十七
我見ても久しく成ぬ═住のえのきしのひめ松いくよへぬらん

同九
夜を寒みおく初霜をはらひつゝ草の枕にあまたゝび寝ぬ

同一
梓弓おしてはるさめけふふりぬ═明日さへふらバわかなつみてん

同四
秋きぬと見にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

同十
いさゝめに時まつまにぞ日ハ経ぬる═心ばせをバ人に見えしつ

金九
ます川氷ハ何をも八十にあまりぬるをあふ坂川のながれざりけりぬる

新五
山おろしに鹿の音たかく聞ゆなり尾上の月にさよやふけぬる

後五
こむといひし程や過ぬる═秋の野にたれまつ虫の聲かなしき

同十三
深く思ひそめつといひし言の葉ハいつか秋風吹きてちりぬる

新勅三　家隆
うちたへていくかへぬる═夏引乃手引の糸ゆふ每の宿し

㊧

こそ

古四
大かたの秋くるからにわが身こそかなしき物と思ひしりぬれ

後拾三
寐ぬよこそ数つもりぬれ郭公きく程もなき一こゑによりて

つ右　つる中　つれ左

第二十段

㊨

は　も　徒

後六
花みにと出にしものを秋の野は霧にまよひてけふぞくらしつ

古十九
身はすてつ心をだにもはふらさじつひにハいかゞなるとしるべく

新一　躬恒
わがこゝろ春の山べにあくがれてなが〳〵し日をけふもくらしつ

古十三
けさハしもおきけんかたもしらざりつ思ひ出るぞきえてかなしき

後拾九
人よりハあくがるゝこゝろましますゝ花のみやこにやどり定めつ

古十七
わがこゝろなぐさめかねつさらしなやおばすて山にてる月をみて

㊥

ぞ　の　や　何

古十一
あしひきの山下水のこがくれてたぎつこゝろをせきぞかねつる

同二
ぬれつゝぞしひてをりつる年の内に春ハいくかもあらじと思へば

いせ物語
夜もあけばきつにはめなでくたかけのまだきに鳴てせなをやりつる

後七
あだぞなきる人なきやまながし鳴なれあやにぬらしそめつる

拾二
みやま出てよはにやきつる時鳥あかつきかけて聲のきこゆる

新一
春ごとにこゝろをしむる花の枝にたがなほざりの袖かふれつる

古一
たれしかもとめてをりつる春霞立かくすらん山のさくらを

㊧

こそ

同十七
おきつ浪たかしの浜の浜松の名にこそ君を待わたりつれ

同十三
よるべなみ身をこそ遠くへだてつれ心ハ君が影となりにき

右

右	中	左
落（つ）	つる	つれ
来（く）	くる	くれ
得（う）	うる	うれ
寝（ぬ）	ぬる	ぬれ
経（ふ）	ふる	ふれ

第卅一段（此中にうる□うれ□ハ歌に見あたらず）

此段より下 第卅一段まで。合せて十一段也。右の行も□も□徒の詞歌いとすくなき故に。なべて八畧して中にまれ見えあたりたるかぎりをバ。悉くにもらさず出せり。

徒

ぞ

万十五 秋山乃紅葉をかざしわがをれば浦しほみち［く］＝いまだあかなくに

古二 かすみたつはるの山べはとほけれど吹くる風は花のか［ぞ］［する］

千五百番 かすむより雲路にのこ［ぞ］聲ハ［する］＝浦べのしほぢも神べのむらどりを

後十三 ゆふやみは道もみえねどふるさとはもとこし駒にまかせて［ぞ］［くる］

古十八 逢坂のあらしの風はさむけれどゆくへしらねバわびつゝ［ぞ］［ぬる］

中

ぞ	の	や

後十四 いにしへも今も心乃なぐさめだ［ぞ］こひをしらで年をのみ［ふる］

拾一 旅もいまでながめて［ぞ］［ふる］＝山吹乃花さかりぞうつろひぬらん

古十八 あかざりし袖の中にや入にけん［わがたましひ］［の］なきこゝち［する］

新三 ほとゝぎす深き峯より出にけり外山のすそに聲［の］おち［くる］

［ぬる］

後拾 いにしへのちぎりをなくやなりにけん＝松見しあと［の］絵てぞ［ふる］

古十一 はつしほの山わけてぎよしたぎつせて［や］忍びしこひつゝわたらふ［する］

同 思ひやるさらひとちるらふなり［や］［する］＝まづ夢路にかよふ人のなき

同十三 みちのくのなきとがこえどうらしとあをバ［や］［くる］あでかよふの是なめ

新勅一 夏カ下 白妙乃波路わきて［や］春は［くる］＝風ふく（[illegible]）まゝに花もさきけり

や

何

古今

後六
秋の[illegible]におかるく[illegible]しらふ人[illegible]つ や ふる

ぬる

五十四
たが 里によがれをしてか[illegible]たゞこゝにしも寝たる声する

夏万下
秋のむし たのむ らじしらぬ我の ちる = 松らし 蔭に宿や りんと鳴く

拾七
[illegible]の葉のうへのぬるてふの いろ なる[illegible]より[illegible] くる

新三
郎[illegible]て[illegible]きていぬる[illegible] いろぞ か人乃いきをやむく ぬる

拾十九
行りとても いく よゝは ふる = かくてみれちらぬかきて[illegible]に[illegible]きたん ふる

古十一
お坂の宮[illegible]ながらへいそしみいまでん[illegible]おのひ こそ それ

拾十一
[illegible] こそ ハうえぬ人こふるやまひ それ = あひみるでハやむ[illegible]

左

古今

古十三
思ひ出でゝ恋しき時は[illegible]の山より月は出でゝ こそ られ

ぬれ

新盛集
年をへて[illegible]葉の下[illegible]てしら[illegible]老とらふとも[illegible]ぞ こそ ふれ

○第廿二段を第廿五段に合せて行ぐ

○第十三段ハ第卅一段に合せてあぐ

く 右

くに 中

くま 左

第廿四段

右

徒

金口
みむろ山に紅葉ちるらし旅人の菅のをがさに錦おりかく

古又
立田川にしきおりかく く = 神無月しぐれの雨をたてぬきにして

左　中

こそ　何　や　の　ぞ

古五
神なびの山をすぎゆく秋なれば立田川にぞぬさハたむくる

同巳
をみなべしうしとみつぞゆきすぐる「男山にしたてりと思へば

好忠集
玉垣のみ川の湊漕ぎたれば渡らふ人の花幣たむくる

拾遺忠岑
みてぐらのきつやいまぞ此川瀬に山の神をとぬさやたむくる

[illegible]
山めぐり鳴るやをとぐる「松風のおくるときけば秋のまがき

くる　くれ

左　中　右

こそ　何　や　の　ぞ　結

けり　右
ける　中
けれ　左

此下五段

万八
我君にわけハこふらし給ひたる茅花をはめどいや痩しやき

千一
山ざくらかをりおぼろ行かりをバつらき抱かる風ぞあらゝける

新勅十一忠義公
よそに出て今ぞしらける「人しれず思ひむすびつるぬりにきしろを

ける

月清集
ふく風やそらにしらるゝける「よしの山花にゆきかよる花乃しら雲

ける

後十六
見がほど成いつなかりしてかあらはれをあらしゲにては秋におくける

六百番
秋くいへぞうつゝ鳴るか小萩にやどれるをこそ花をしまるけれ

なぞ

（源氏総角）さらこそ思ひなるまじき咲かぬ花も知る人をつらきあるまじきぬよき

つ　右

つる　中

つれ　左

古今六帖　（才十六段のつ等とは異なり）

（好忠集）老よける玉ひもまとのぶさり葉は秋にぞちるさハそこつる

（拾十二）音なしの川とぞつひに流れいづるいはで物おもふ人のなみだハ

つる

中

何　や　の　ぞ

（後十）難波がたかりつむ芦のあしづゝの一重も君を我やへだつる

（源氏桐）九重に霧やへだつる雲の上乃月をはるかにおもひやる哉

（六帖）みくまのゝ浦の濱ゆふいくかさね我をバ君がおもひへだつる

（後拾十九）こやこそハたれをか君ハ思ひいづる恋の人を忍ぶをおもふなるらむ

つる

つる

つる

左

なぞ

（六帖）おりたてバ身こそそほづれ春は田のあぜかくるゝも今ハやめてん

つれ

ぬ　右

ぬる　中

ぬれ　左

古今七帖　（才十九段のぬ等とは異なり）

右

え

（拾七）鳥の子えまだちひさくかへていぬかひの兒ゆるハをりつゝあらりけるかな

中

や　の　ぞ

（源氏宿木）うつり香はむつまじとききしに身ふやしきちぎりをわけてしらぞしらぬる

（新十三）露しけふらふぞたづぬるおく山の月影の露に袖をぬらしつゝ

ぬる

ぬる

何　こそ

左

新古十一
たれぞこのみるめおもひげもなきまくかんの乃きみの絶まをかぞ ぬる
ぬれ

ぞ　の　や

中

ふ　右
ふる　中
ふれ　左
第廿八段

新勅九 読人しらず
山あゐもてすれる衣の赤紐のながくぞ恋を我に流り ふる

同十七
はらつき所りそぞあハまきうちそふる＝うちよの夢乃さむる枕は
ふく

続古集
きみのえ様年経る松のよハひをバかぞへつゝもしれぬやらぬ ふる

や　何

千四
きみ恋ふる浅茅か露やおきそふる＝たまれバいとゞ袖のしをるゝ

玄永
ちゞめなく何まてふかるむさし野いかなのまバかりなくハたが ふる

万八
なにしもをとこふる＝郭公鳴て急きけバ急きそまされ
ふれ

左

こそ

住吉哥合
月残る浜にこそ光かおふれ＝ふく住よしの江もつひなき

む　右
むる　中
むれ　ナ
第廿九段

右

徒　ぞ

万十九
ほとゝぎすいまきなきそむ＝あやめ草かづらくまでにかるゝ日あらめや

玉十八
谷をいづとうそしてこゑかなるらん＝ゆきとまるをぞ家とさだむる

後十九
おさへつゝ我ハ袖にぞせきとむる＝舩こすしほになさじと思へバ

中

の　や　何

（古十五）今しはとわびにし物をさゝがにの衣にかゝり我をたのむる

（万十四）あひ見ずてこひもしぬとや[illegible]時にきこえるよむる

（後千五）いそ又むしやうらむる　浅茅原おきそふ霜の夜ごとに[illegible]して

（万十一）ゆくりのやまさへぞ浅みにあきてまぐまつ君をたまからでむる

左

こそ

（玉葉恋）しづの[illegible]のまがれの瀬に立よれど何まこそつれに沼とゞがなき

（後拾十八東）ころをば・あれしこそあさきむき　行ほしごれとぞかゝりに

ゆ　右

ゆる　中

ゆれ　左

第三十段

え

（拾十五）山里は我家をかくしこあられど垣根の柳末え下に見ゆ

右

は　も　徒

（五社百首）夢路にはあふとし見ゆ　うつゝはうつの山べ乃[illegible]いふ

（仝二）雪ふりしとまがひもそて次卯花八まだ六月の氷かとも見ゆ

（万十七）しぶたにのさき乃ありそによする波いやしくしくにいにしへおもほゆ

（同三）大宮のうちまできこゆ　あびきすとあごとゝのふるあまのよび声

中

ぞ　の　や　何

（後七）秋風にさそはれわたるかりがねは雲ゐはるかにぞきこゆる

（古六）行くりのやまとみの山をたてくればかつぞ見えゆる　君がすむ年八

（拾二）みやこ出てよはみるやきゝつる　郭公行らきゝけそ都のきこゆる

（伊勢集）あてしこは花咲をむる友のまふにむぐらしのやゝ咲ゆる

（新十六）しらしはらかんまのまり川山ぶき花とやえゆる　春はよの月

（万十五）わぎもこがいかに思へかぬばたまの一夜もおちず夢にし見ゆる

何

恋十二
こゝろにてたき川いかで いづれ ハめにもみえ ゆる ＝ おもふそきけ

左

こそ

永久百首
五月雨ふるに志をれつゝあく軒ぬまぬる こそ てふも雲 ゆれ

古一
冬なりとも こそ 行かねとおもひ ゆれ ＝ とぶ雉にとゞし窓は梅ぞと

る 右
るゝ 中
るれ 左
卅一段

右

は　も　徒　ぞ

堀川後度百
宵にして鶯しるらめしくてさすがに木葉ちる は 晴ま る

古十五
月夜 は こぬ人また る ＝ かきくもり雨もふらなんわびつゝもねん

六帖
花さそふそのなごりと も 見えてこ る ＝ 桜咲八重の都ぞ恋しれ

古五
立田川もみぢばなが る ＝ 神なびのみむろの山に時雨ふるらし

同十七
天の川雲のみをにてはやければひかりとゞめず月 ぞ なが るゝ

中

ぞ　の　や　何

秋十三
夜衣うすれあかつき ぞ 離まさ るゝ ＝ むと人あはれしも身にちかくなれど

中務集
ら川原は秋深りつゝ都にもほど遠き佐保山 の おもひやら るゝ

古十五
夢にだに身をしかくあかりゆくは秋やいかなる人 や まさ るゝ

新古 六帖
しのぶぐさこそ今 や こひ るゝ ＝ 天川かはせゆかしてよるさへなる

古十八
いくよしもあらじわが身を なぞ もかくあまのかるもにおもひみだ るゝ

大和物語
見も見ずも たれ としりてかこひら るゝ ＝ おぼつかなさのけふのながめや

左

こそ

古十二
虫のごと声にたてゝはなかねどもなみだのみ こそ したになが るれ

いせ集
かゝるまでよるはうき世 こそ 離まさ るれ ＝ ぬるまもいづくわたりんとおもへど

う 右
うる 中
うれ 左
卅二段

此段徒字ハなし

○是より下ハ二轉也（まへより八段と同し／いつゝごとし）

く　右

け　左

第廿三段

は　も　徒

古一　みやへちかく花見しせきばうぐひすのなくなる声はあさな〱きく

後十　思ふらんとれをし人もかはるときくつりしその紫いづちいかきん

古七　ふたゝびもさかれし河あらしふく山の尾のへもいろかはりゆく

拾下三　久かたのあまてる月もかくれゆく何によそへて君をしのばん

古十九　秋風にほころびぬらし藤袴つゞりさせてふきりぎりすなく

新六　やたのゝに浅茅色づくあらち山峰のあは雪さむくぞあるらし

右

ぞ　の　や　何

古十五　あかつきのしぎのはねがき百はがき君がこぬよハ我ぞかずかく

同十二　よとゝもに流れてぞゆく涙川ふゆもこほらぬみなわなりけり

同一　春たてバ花とやみらん白雪のかゝれる枝に鶯のなく

同二　春霞たなびく山のさくら花うつろはんとや色かはりゆく

同三　くるゝかとみれば明ぬる夏の夜をあかずとやなく山郭公

同　はちすばのにごりにしまぬ心もて何かハ露を玉とあざむく

後拾四　秋萩のはちくをしとなど鹿のなくうつろふをハおのがはなかと

左

こそ

拾十　恋そふて袖ぞかわくをやつてたらんわかみハ身をもうかとこそきけ

後九　よをしふかるかしこそきけなげつゝまふをうら人のこゝろにうらみん

○玉のを一

〇廿六

右

は　も　徒　ぞ　の

す 右

せ 左

第四段

堀川百首
よしの山のみねの秋霧しばなるまゝにそのうゑがなりくるます

五十六
しの萱生る山下みちやどるよ八月さへ茅のいろをぞさす

五十二
あふりある浪ぞ袖に玉ちるをなこそこゝをせきいりへぞ渡つせなれど

す

左

や　何　こそ　は

新古今忠岑
さゝべくぎの菊がの錦きえぐさをやこのみの月に民に衣ぞこす

後撰　實方
うし風やそよぐに浪こそ涙雲に錦よかゝりきて鳴千鳥かな

後拾遺
むかしかぎりありなばさてもやむべき涙など二そにおもひるやます

堀川百首
ゑふ人もかきしる里に清齊生はこゝろにまでにたかりこそませ

後拾遺
家ありぬこがれしとおもへど秋のよさかくこそたゆせおきぬなかくに

つ 右

て 左

第五段

つ

右

何	や	の	ぞ	徒	も

つ

（長秋詠藻）冬の夜は月と雪とを見る折り花の咲え面影そしぬつ

（後拾）天川いはこす浪乃たちおつゝ秋の七日けふをしぞまつ

（古十六）ちのなみだ落てぞたぎつ白川は君が世までの名にこそ有けれつ

（続拾十一後朱雀）人しれぬねやのうちにてなきぬらんわかれましごとのおもかげふたつ

（六帖）あくにまてつがわするゝ月を山端のまちし里にはおそしとやまつ

つ

左

徒	も	は		こそ	何

（古今）宮城野もとあらの小萩露をおもみ風をまつごと君をこそまて

（拾遺）人しまつぞて落涙こそまてそゝぶき人なき宿にかまるゝちる暮

ふ 右　へ 左　貫此云底

（万十）かみちぢく今はうつろふ見花もこがまるらんといひしのへゆけバ

（全五）くもりなき秋はあらたに行雲なる終日の里はむかうしそふ

ふ

（続千）こよひしも雲ゐる綾月もむかうそふ秋のみ山を思ひしぞやまき

（続拾十一）わがきみは千代の始乃あそひ山天てる神のむかうしそふ

右

徒　ぞ　の　や　何

左

こそ

古八 あかずしてわかるゝ涙瀧にそふ水まさるとや下はなかるらん

同一 春来ぬと人はいへども鶯のなかぬかぎりはあらじとぞ思ふ

同十八 たつかこの言づてしとぞ今は思ふ我か人かく身をまどはするよふ

千五 夕霧や秋のわかれをこめつらんふかける袖に露のれなそふ

後拾十一 しのぶるに命絶のぶる物ならば千年もかくて有んとや思ふ

後八 秋な月くまなきとや有ふもみぢぞのやむ時もなくよるさへふふる

古四 たが秋にあらぬものゆゑ女郎花なぞ色に出てまだきうつろふ

千三 ちるむしろを心あしくはなにかいふ秋ぞ見えねど見えてもしる

古八 秋萩乃花をぞ雨にぬらせども君をばましてをしとこそ思へ

同一 をりつれば袖こそにほへ梅花ありとやこゝに鶯のなく

む 右

め 左

第廿七段

右

は　も　徒　ぞ

む

いせ物語 いかりおろきまでの田長は猶しのむ赤住里にてありし語ぞそ

む

千十六 ゆくあきや玉つく袖のうらさびてあはれにみやこの月むかふらむ

古十七 いにしへの野中の清水ぬるけれど本の心をしる人ぞくむ

同十八 我がいほはみやこのたつみしかぞすむ世をうぢ山と人はいふなり

㊧

の　や　何　　覧　そ

む

（續千十七　此春アリ）よるは海よりちかくむかふるはるかなるやくとはかくるみそきをやつむ

（續古六）たちもみきつるをやよのむ　秋風はらふ衣八寐もなくし

（万十九）春まけてものがなしきにさよふけてはぶきなく鴫たが田にかすむ

（續後古）くもあだに[illegible]紙なにからやむ　ますほのますゝき[illegible]八おもしろしとせよし

（後一）春はみぬ山をたづぬとやらぬ身を老若菜八つまでゝ年をこそつめ

（後京極衡集）かぬより八枝こそたのめ　菜は紫に夕霧たちぎくおくやまるらん

ふ　右

き　左

并此八段

（後一）いづこにか春はむかりはとゝなくにまどみしのゝ山そ重ふる

㊨

そ　も　徒　ぞ　の　や

（後拾十五）出でゝよはの寐覚えそ思ひやる　いかなる鷺か[illegible]らん

る

（後九）夕ぐれをまつ川にとかくる　白浪のおくる袖やきえん八ちる川らん

（古七）なはふんがでさぬみちつゝしはる衣しまきの濡りたび波る

（万十五）おきべよりふな人のぼる　よびよせていざ告やらん旅のやどりを

（古十七）さきくちらは風のさそふむらひおまてよるこれ時の綾よぞある

（同十八）はるそての本にふたちぞよる　春はさやまの霞を越つ

（日本）これは乃者て露はねきてそよとわし　山のかきのおとばいつちる

（後三）さくら[illegible]しつゝ袖をはらへなむ乃やちるらとやみなといふなる

（同日）ほとゝぎすきては旅とや鳴らさる　あかるゝ[illegible]新年

左

何　こそ

左十八 難波がたうらむべきまもおもほえずいづこをみつのあまとかハなる

同二 花ちらす風のやどりハたれかしる我にをしへよゆきてうらみん

同十一 あけたてバ蝉のをりはへ鳴くらしよるハほたるのもえこそわたれ

同十五 [illegible]ねぞちひこそまされみなせ川[illegible]思ひそめけん

ん 右

め 左

第卅九段

こゝより下五段のとむる辞に。むもじをかゝずして。んとのミかけるハ。第廿七段の。ためしにむと唱る言に。まぎれざらしめんとてなり。実ハむもじもおなじ

は　も

古八 きみがゆくこしのしら山しらねども雪のまにまにあとハたづねん

同四 月草にころもハすらんあさつゆにぬれてののちハうつろひぬとも

同九 秋霧ハけさハなたちそさほ山のはゝその紅葉よそにても見ん

右

も　徒　ぞ　の　や　何

同 恋しくバ見てもしのばんもみぢ葉を吹きなちらしそ山おろしの風

同一 山たかみ人もすさめぬさくら花いたくなわびそ我見はやさん

同十七 かゞミ山いざ立よりて見てゆかん年へぬる身ハおいやしぬると

後七 [illegible]づくまでよはひの[illegible]花さかバちる[illegible]秋にぞ徒ハ[illegible]らん

拾又 うぐ[illegible]ぞえん[illegible]の形だに[illegible]

ん

古四 [illegible]ふかしつる糸の[illegible]年のをながくこひやわたらん

同又 うゑしうゑバ秋なき時やさかざらん花こそちらめ根さへかれめや

同十九 なにはなるながらの橋もつくるなり今ハ我身をなにゝたとへん

同十七 うれしきをなにゝつゝまん唐衣たもとゆたかにたてといはましを

左

こそ

同九　夕月夜おぼつかなきを玉くしげ二見の浦はあけてこそ見め

同十五　吉野川よしや人こそつらからめ＝はやくいひてしことはわすれじ

らん　右

らめ　左

第四十段

は　も　徒

古八　別ニて唐ゞあく那る行冬の行しくるの衣はみちしぬらん

拾一　梅が枝にきゐるうぐひすはるかけてなけどもいまだ雪はふりつゝ

後十四　よろこびしきみがゆくてのほどをだにへだてゝもまたふきやまぬらん

拾七　みよし野も生ふるまつむらん＝まつむしの桂ふすゑて日数ふるなれど

後七　思ひ出づるときはあれど＝秋たつる鳥のなき空見えるなるらん

後拾四　いとゞしく春をうるらん＝ふるさとの秋あつる天の羽衣

右

ぞ　の　や　何

左

こそ

古七　春日野にわかなつみつゝ万代をいはふ心は神ぞしるらん

後十八　蓮葉のにごりにしまぬ心にぞ人を見るらん＝よそながら世の中におもふ

大和物語　山里にしもたれをかもとめてあはれとおもふのきはの月にたのむらん

古一　袖ひちてむすびし水のこほれるを春たつけふの風やとくらん

同四　鳴わたる雁の涙やおちつらん＝物思ふ宿の萩の上の露

同　もみぢ葉のちりてつもれるわが宿にたれをまつむしこゝらなくらん

同二　春霞なにかくすらん＝桜花ちるまをだにも見るべき物を

同十七　ちはやぶる神の山もみこそ八千代のるも思ひつらめ

同十三　あさみこそ袖はひつらめ＝涙川身さへながるときかばたのまん

右

は　も　徒　ぞ　の

けん　右

けめ　左

第四十一段

（新千七 西行）いつとてもかくて風もさはらぬ若葉らに萩八重先まではありとけん

（新続二 宜秋門院丹後）花ゆゑに行ぬるよりはあらじけん　思ひきやしばしもかへる春の那

（新千八）おそくとくみたてしいふし人を堂をむけも思はざりけん

（源氏 椎本）あき人もおかしざりけん　うちきそく夕の露をきくれとそ

（古十五）よそにのみきかまし物を音羽川わたるとなしにみなれそめけん

（月清集）この花をおのが月夜とおもひけん　了思とも許ふろ那

（千五百番）君がへん千代のためしとぞ小松原まつしもはちもいちひきそめけん

（拾九）行かへじよりもしぞ別まけん　あふろ難波の浦をさしてみくらき

（万十七）渉墨生けら百本の梅乃ちるとむのわかるゝびあがりをと縁けん

左

や　何　こそ

（後十七）こゝろちよくかくまえこそしとかくそ玉ぬきが黒髪を黄ぞともや有けん

（古二）夜山そしてしらし人や入りけん　こゝ思ふろたくいたく許ふ

（同十二）東路のさやの中山なかなかになにしか人をおもひそめけん

（同十一）なみだ川なにみなかみをたづねけん　物思ふ時のわが身なりけり

（後十一）かくし夜また川をしみしかんこそ二心しし山の雲となりけめ

（古十六）行ふまでの形見とてこそとゞめけめ　涙ぞうかぶくづれまりふし

は

なん　右

なめ　左

第四十二段

（古十七）かたちこそみ山がくれの朽木なれ　こゝろは花になさばなりなん

（同十八）いざこゝにわが世は経なん　菅原や伏見乃里の荒れまくも惜

㊨

何	や	の	ぞ	徒	も

同廿 君をおきてあだし心をわがもたバ末の松山波[こ]そこえ[なん]

同十八 いざ桜我もちり[なん]＝ひとさかりありなバ人にうきめ見えなん

同十 人しれず思へバくるしくれなゐのすゑつむ花の色にいで[なん]

同十八 足引の山のまにまにかくれ[なん]＝うき世の中ハあるかひもなし

[なん]

新千十四小て大弐 恋しくバ秋のま川みなぐひ妻の鳴て[ぞ]き[なん]＝花ぞちるらん

新千五 行春のあかくゝ後の空はに[の]思ひふむまよはれ[なん]

古五 立田川紅葉みだれてながるめり渡らバ錦中[や]たえ[なん]

後六 秋の野にねなんと[や]旅[なん]＝女郎花名をむつましみこころひとけつ

後拾十三 あやめ草うくゝるも苦しかまつら[いろ]なる方に思ひたえ[なん]

㊧

[こ]そ	何

新千廿 [いづ]くにゆきてかくれ[なん]＝世中に身をわすれバやこそ人もはらふき

古十九 よの中ハかりにしびてふ身をすぎバ涼き谷[こそ]流くあり[なめ]

同十 何をて[こそ]思ひん中はたえ[なめ]＝さ浪より後のまよふくさふ

徒	も	え

[てん] 右

[てめ] 左

右四十三段

後十三 涼みぎり涼なん松乃えふし何しかんきれ雁なも波[こ]よせ[てん]

古十四 松風こししらの葉今[を]久し[てん]＝とがくしふるまバおもよござろ法し

古十九 何りそてといくよあらんふる＝うしむ錦そく雁まみへふ身を[と]なぎ[てん]

六帖 うきまーかぜバ秀子[と]し[てん]＝三輪の山もと沈様し杉立るくたち

古十八 よふかまでバらくさてそまされみよし錦し昔のみさびてくふらなし[てん]

右　　左

徒　ぞ　の　や　何　こそ

後二
ちらぬまをまくらん てん ことし行の一よおね独りしちりまどひて出せけ

てん

てん

古十
何をとえて松むそうくわうつまのよをバ奏しと や 思ひ有し てん

貫之集
えてのち や 立ちらじ てん さそひをちるまくしむふかひしなければ

古一
春日野のとぶひの野もり出て見よいま いく かありてわかなつみ てん

拾春忠岑
山ざくら山乃ひろ紙 たきえ え てん いくよの花のそふやどらぶ

古一
ちりぬれバこふれど しる しなき物をけふ こそ 櫻をらバをり てめ

○

は　も　徒　ぞ

○三轉の外

まし

是ハまたくゝる辭にて上の四十三段の辭のなかに三つまと二つまも挑ることなし。ぬも同じ續の外なり。

古一
よの中にたえて櫻のなかりせバ春のこゝろ は のどけから まし

拾十六
松ならバひく人けふ は ありな まし 袖のみどりぞかひなかりける

古二
花のごと世のつねならバすぐしてしむかしハ又 も かへりきな まし

拾十四
さとえぞバ忘しきてし も あら まし 春すがら人をきゝしべりける

まし

後拾一
思ひおくことなから まし 庭櫻ちりての後のぬしなりせば

後七
宇治山の紅葉を見ずバ長月のすぎゆく日をもしらじ ぞ あら まし

ぞ　の　や　何

古一 けふこずば明日は雪とぞふりなまし　きえずはありとも花と見ましや

まし

古一 春くれば雁かへるなり白雲のみちゆきぶりにことやつてまし

後十 いかに恋しゆきてや見えまし　津の国にいまもありてふ浦のはつしま

古一 うぐひすの谷よりいづる声なくば春くることをたれかしらまし

後五 ほには出ぬいかにかせまし　花すゝき身を秋風にすてゝやみなん

此余にはましと結べる例なし。但し中昔頃にはましかと結べることもあれど。そはその頃の歌に出来る也

らし

○

は　も　徒　ぞ　の　や

六帖 立田川ぬさとをみし時雨に山のもみぢも今はちるらし

古四 さよ中と夜は更ぬらし　雁がねのきこゆる空に月わたる見ゆ

新十 春風のふくにもまさる涙かな　わがみなかみもこほりとくらし

源氏をとめ をとめごも神さびぬらし　天つ袖ふるき世の友よはひへぬれば

古五 たつた川もみぢ葉ながる神なびのみむろの山にしぐれふるらし

同六 みよし野の山の白雪つもるらし　ふるさとさむくなりまさるなり

同 此川にもみぢ葉ながるおく山の雪げの水ぞいまさるらし

同 ふる雪はかつぞけぬらし　あしひきの山のたぎつ瀬おとまさるなり

建保四年百首 定家卿 花まがふ峯べの雲ぢわけてみる里人のかざしなるらし

新勅撰 藤敦仲 いつかたにかぞふるつのはにさしかしれ春むかへぶやすだらし

や　何　こそ

後拾三　きゝつるや初聲なるらし時鳥おいは寝ざめぞうれしかりける

家隆卿集　東路やとづなの橋をうちこえていくへか雲路下になるらし

新古六寛和哥合　え川時雨ふるなる山里いかならしすむ人さへや袖のぬるらん

後五　松の聲に風のしらべをまかせてハ立田姫こそ秋ハひくらし

古十七　ぬきみだる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせばきに

はも徒ぞのや何こそいづれの結びともなるハ。らしのゝみして。他の辞よりハ係なきこと也。

は

つゝ

古一　梅がえにきゐる鶯春かけてなけどもいまだ雪はふりつゝ

○

も　徒　の

後八　ふるさとの雪ハ花とぞ降つもるながむる我もおもひきえつゝ

古四　やどりせし人のかたみかふぢばかまわすられがたき香ににほひつゝ

同十三　花すゝきほに出てこひば名をゝしみ下ゆふひものむすぼゝれつゝ

拾十六　うめの花春よりさきに咲しかど見る人まれに雪の降つゝ

つゝの上なる志のめくはも徒のあり。ぞや何こそとかゝりてハ。つゝと結ぶ係なし。又つゝハなかばにてハ切れざる故に。なかうぞまて結づる事なし。

右ハいづれも下にことをふくめて結ぶつゝし。此外にてふかくつゝハ切れざる辞なれバ別し。そハ六の巻のつゝの條に出せり。

かな

○

の	徒	も	を

拾六 うたがはし消せぬものを身ながらやすかしにをかの涼かな

後十四 忘る君のなさもつれなき思ひかな行までも我衣の袖もへなくに

古一 をちこちのたづきもしらぬ山中におぼつかなくもよぶこ鳥かな

古四 をみなへしうしろめたくも見ゆるかなあれたる宿に独たてれば

古十一 音羽山おとにきゝつゝあふ坂乃関のこなたに年をふるかな

後六 くるゝがゝに似たる物かな女郎花秋よりのちにあふよしもなし

古四 井川人にいはぬものから神な月さ時雨思のめづらしきかな

後十 ことかくといふ名の案のえしなかな

いづれハ家のかゝりどころをならの上をたのめくをも結の也。ぞや何ぞとかゝりてハ。かなとむすぶべし。ぞといひてかなと結べる所あるハ。てにをは三の定ぞの部ならへり。

○上の件りの條々。又こまかなるを洩しあれど。しるべく。此書の中ニ引出る證哥ハ。いづれも古今集也。さてハ後撰拾遺よりつゞく新古今まで。勅撰の集をむねとしてとれるハもとよりなれど。此集などハ妨るきともあれみだりなる哥のたがひの。撰集はことに正しけれども。千載たがはざるところぞ。萬葉六帖をそへし。其外の哥どもぶり。新勅撰集などにも及べり。撰集も新勅撰より以下のハ。八代集に入たる人のうたをとりて。其の後の人のをまさしくとらず。そもそもかく時代をくだれるハいふもさらなり。大かた古今集を。八代集までてよろづそむかで。たゞハぬところしなけれど。ちかくこきんのかぎりをなせる事も。又よく新撰集の中に。萬葉よりえらびたる哥どもハ。大かた耳どほく詞つきあるをバ。なずらへ

いふなるをもてハ。井とにてふをそのこのへをいやまり。いふハ訓の誤なる
を。そのまゝにこゝろえずせしまでなる得たらぬに。むかしのをおほかれど。なぞらへ
ならん。

○上の件。很く語らぬに。兩く法の語関ありがおほきを。おのづから語乃
よりこぬなふまとふなきことはいふべく。又おのが考へもしせることおほかるべ
ければ。後撰の集よりの歌合る首などに。ひろくあまねくわたらなへなばハあれ
こまかれてみのこゝろをいつくしたまへ。後の人考へ出さんまゝに。
かきくはへてよ。

○古歌を引出るかしらに。古今集なるハ古。後撰ハ後。拾遺ハ拾。後拾遺ハ後拾。
金葉ハ金。詞花ハ詞。千載ハ千。新古今ハ新。新勅撰ハ新勅としるせり。か
ところの下にそのふみのなくへてあるべし。又その下に作者の名をしるせるハ。その歌のついでなり。